



# PHANTASIE II

A MULTIPLE-CHARACTER

ROLE-PLAYING QUEST

フェロンラの章

## フェロンラの章 イントロダクション

ジェルノア島の南に位置する偉大なる美と魔法の島、フェロンラはかつて貿易と工業、強大な海軍力で栄えた都市であったが、40年前に不気味な雲が島全体をすっぽりと包んでしまっ以来、島への往来はまったく途絶えてしまった。しかし、島の中で何か恐ろしい災厄が起こっていることは確かなようである。ジェルノア島の海岸を離れたばかりの小さな釣り船の中で、冒険者はフェロンラを覆う暗雲について話を聞いていた。船頭の老人は慣れた手つきで漁網をひきあげながらこうつぶやいた。

「わしのおふくろが死んだのも、あのニカデマスの仕業じゃ。」

「何だってニカデマスだって。」冒険者は尋ねた。

「ああ、妖術使いの悪党じゃ。わしの愛するジェルノアのほとんどを目茶苦茶にしたやつじゃよ。フェロンラは今、悪と暴力でみちあふれておる。知っているじゃろう。島から出てきた奴は一人もおらん。けれどもここらじゃこういう噂が流れておるのじゃ。フェロンラには昔、わしも見たことがあるがかなりの船があったんじゃ。美しく、速い船じゃったが今はみななくなってしまう。モンスターどもが船をこわしてしまつてのう……」

「船はどうだっていいんだ。人間はどうしたんだ」と冒険者は叫んだ。

「人々はどうなったんだ。どこにいるんだ。」

「誰も確かなことは知らんのじゃが、ニカデマスは新しく奴隷を集めたというからたぶんそうになったのじゃろう。今はその奴隷たちに武器を作らせているということじゃ。ニカデマスは他の国に侵攻しようとしているらしいのじゃよ。」

冒険者は身を乗り出した。

「なぜあなたはニカデマスについてそんなに確かなことが言えるんですか。」

「わしはあの妖術使いがどんなやつか知っているからじゃよ。」と老人は叫んだ。

「2~3年前のある夜のことじゃ。わしはパピコットの近くの海岸の沖で漁をしておつた。

強い南西風が吹いてきて、わしのおんぼろ船は転覆しそうになったわい。嵐が静まってからわしは家に帰ろうと船をこぎだしたのじゃが、突然目の前が一面霧になってしまった。わしは何をすることもできなかった。わしの船は今でもフェロンラにかかっているあの雲の中に入ったままじゃよ。」

冒険者はまた雲のことを聞いて、さらに耳をそばだてた。

「わしは一週間ほど漂流して死にそうになった。そしてある朝雲のないところまで流されていたのじゃ。わしが生きのびられたのはパピコットのモンクたちと生活したことがあるからじゃと思う。そのときわしは呪文を少し教えてもらい、魔法の杖の使い方も学んだ、それが役にたつたに違いないと思うのじゃ。とにかくニカデマスはあの雲を使って人々の往来を断ち、中で何か悪事を企てているのじゃ。」と彼は暗い表情で話した。そしてその目にうっすらと涙をうかべながら冒険者を見た。

「わしはニカデマスと剣を交えるには少し歳を取りすぎた。あいつを倒せるのは力と勇気を兼ね備えた偉大な人間だけじゃ。あんたみたいな意気地なしの若僧じゃなくてな。」

「意気地なしだって。」

冒険者が怒って立ち上がったので船がひっくり返りそうになった。

「私は世界で一番の冒険者だぞ。私の剣は稲妻のごとくひらめき、私の呪文にはニカデマスでさえひるむだろう。この年寄め、本当ならおまえの喉をかき切つてやるところだ。そのかわりにお前に私の能力と勇気を見せてやろう。ニカデマスの邪悪な力からフェロンラを救つてやろう。」

「フェロンラへの道は危険に満ちておるぞ。」老人は警告した。しかし彼の瞳は喜びに満ちていた。

「大丈夫かな。」

「もちろんだとも。」

静かに老人は船の向きを変え、こぎ始めた。舳の先はまっすぐにフェロンラを指し、真っ黒な雲がだんだんと近づいてきた。



株式会社 スタークラフト

〒171 東京都豊島区雑司が谷3-22-3 ☎(03)988-2988